

カムチベット語嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam] 方言の文法スケッチ

鈴木 博之

キーワード：カムチベット語、Melung 下位方言群、咽頭化母音、格体系、動詞接辞

[要旨] 本稿では、中国雲南省維西県攀天閣郷で話されるカムチベット語嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam] 方言 (Sems-kyi-nyila 方言群 Melung 下位方言群) の音声・音韻および形態統語論の簡便な記述を行う。後者については、特に格体系と動詞句周辺の接辞を中心に述べる。

1 はじめに

中国雲南省迪慶藏族自治州維西僳僳族自治県南部を中心に話されるカムチベット語 Sems-kyi-nyila (香格里拉) 方言群 Melung (維西塔城) 下位方言群に属する各種方言¹は、筆者の調査に基づいて、チベット語諸方言の中でも非常に際立つ「そり舌化母音」や「咽頭化母音」をもつということが分かった (鈴木、ツェリ・ツォモ (2007)、Suzuki (2009b, 2011)、Suzuki & Tshering mTshomo (2009)、鈴木 (2009a, 2010ab, 2011, forthcoming) など)。このために、この下位方言群の諸方言は音声分析を中心とする記述が先行し、形態統語の方面の記述は Suzuki (2010) で提供した程度である。

この下位方言群の話者数は Sems-kyi-nyila 方言群の中でも特に少なく、《維西僳僳族自治県概況》(2008:35-40) に記載されている 2004 年時点での人口資料に基づくと、維西県において Melung 下位方言群が用いられる郷鎮に居住するチベット族の人口は以下のようなものである。

- | | |
|--------------|----------------|
| 1. 保和鎮：553 人 | 3. 塔城鎮：7257 人 |
| 2. 永春郷：186 人 | 4. 攀天閣郷：1284 人 |

以上のうち、保和鎮・永春郷の場合は他の郷鎮から移住してきた人が大半を占め、Melung 下位方言群に属さない Budy (巴迪) 方言²を用いる地域の出身者もいる。そして、この地域ではもはや日常的にチベット語を用いる機会がほとんどない (鈴木、ツェリ・ツォモ 2007:94)。塔城鎮の場合、主に其宗村および巴珠村で話されるチベット語は Melung 下位方言群に属さない³ため、これらの話者の数も除外しなければ Melung 下位方言群の方言の話者数を示すこと

¹ 方言区分については鈴木 (2009b)、Suzuki (2009a:17) を参照。Melung 下位方言群に属する方言は、現段階では維西県保和鎮、永春郷、塔城鎮、攀天閣郷および麗江市永勝県大安郷に分布する。なお、Suzuki (2009a:17) で所属未決定としていた大安郷の方言については鈴木 (2009c) を参照。

² Budy 方言の所属は sDerong-nJol 方言群雲嶺山脈西部下位方言群である。維西県北部で話される。

³ 其宗村で話される Qidzong 方言は Sems-kyi-nyila 方言群雲嶺山脈東部下位方言群に属する。一方巴珠村の方言は 2 種類あり、1 つは Qidzong 方言と同様に雲嶺山脈東部下位方言群に属する (調査済)

にならないが、詳細な資料がないため不明である。さらに、どの地域においても若年層ではチベット語を話さない人もいるため、以上に示した数よりも話者数は少なくなる。

本稿で記述の対象とする嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam]⁴ 方言(以下「Zhollam 方言」)は、維西県⁵ 攀天閣郷⁶ の南西に位置する嘎嘎塘村⁷ で話され、同郷の大部分の話者数が含まれるが、それでも1000人を超えない話者を数えるにとどまると見られる。同村でチベット語話者が集住する自然村は3つあり、嘎嘎村⁸、勺洛村、布魯村⁹ である¹⁰。これらの村では比較的チベット族が集住しているが、村内また近隣の村には僰僰族、漢族、納西族、白族など多くの民族が暮らしている¹¹。

勺洛村に居住するチベット語母語話者の普段の言語使用は、家庭および嘎嘎塘村の中でチベット語母語話者とチベット語を使用する以外は維西漢語(西南官話雲南維西方言¹²)である。勺洛村の中でも、異なる民族言語を話す人との会話はすべて維西漢語で行われる。チベット語による教育の場も存在しない。さらに若年層、特に10代以下の世代ではもはや簡単な内容のチベット語のみ聞いて分かる程度で、話さない人が大部分であり、漢語単言語使用(維西漢語+普通話)になりつつある。また、世代により音声および語彙に特に大きな差異が認められる。音声面では Zhollam 方言の特徴的な音韻と関連する部分に明確な差異を認めることができる。語彙面では年代が若くなるにつれて漢語の使用率が上がり、1つの発話単位において助詞・接辞類を除くすべてが漢語によって置き換えられている場合も少なくない。このような場合に現れる漢語は Zhollam 方言の音体系に従った借用語ではなく、漢語そのもののチベット語への埋め込みととらえることができ、なおかつ当該漢語形式に Zhollam 方言の格標識や動詞接辞をそのまま配することができる。

本稿で用いる Zhollam 方言の言語資料は、筆者の現地調査で得られたものである。主な調査協力者は和群さん(女性)と和春支さん(女性; 和群さんの母)の2人である。文法調査は主に

み)が、一部の老年層は異なる方言を用いていると聞く(未確認)。これら以外の村では、Melung 下位方言群に属する mThachu 方言が用いられる。mThachu 方言については鈴木(2010b)を参照。

⁴ Zhollam 方言による発音は /ʃy: lɔŋ/ である。

⁵ Zhollam 方言では通常 /^hdʒA nɔŋ/ 「街」と呼ぶ。固有名詞としては、チベット文語では 'ba' lung と書かれるが、この語の対応形式は Zhollam 方言では使われない。また、/ni naʔ/ という形式を用いる話者もいるが、これはナシ語における維西県に対する呼称と共通する。

⁶ Zhollam 方言による郷名は /^hp^hA dɔ/ である。

⁷ Zhollam 方言による村名は /^hpō nɔŋ/ である。

⁸ Zhollam 方言による村名は /^hmu k^hɔŋ/ である。呉光范(2009:546)によると、この村の漢語名はチベット語「小さい」の音写であるとするが、それは Zhollam 方言の形式を写したものではない。「小さい」の語義で /ka ka/ といった形式を用いる方言は確かに存在し、sDerong-nJol 方言群雲嶺山脈西部下位方言群に属する方言などがあてはまる。

⁹ Zhollam 方言による村名は /^mbu lu/ である。

¹⁰ これら以外に攀天閣郷では工農村(Zhollam 方言による村名は /^htsə lɔŋ/) でチベット語が話されるが、この村は嘎嘎塘村から離れた位置にある。

¹¹ 広く見れば民族ごとに住み分けがなされているが、幹線道路沿いなどでは多民族の雑居が進んでいる。

¹² 維西漢語については呉成虎(2007)を参照。

和群さんで行い、語彙調査は2人とも参与した。ほかに熊彪さん(男性)、李雲さん(女性;和群さんの妹)および和松英さん(女性)の協力も得て、自然発話を観察する機会を得られた。みな嘎嘎塘村勺洛村出身で、互いに親戚関係にある¹³。本稿の記述のもととなる言語資料は、大部分を漢語を媒介言語とした調査で得られた翻訳形式に基づいている。ただし言語現象の解釈に関しては、自然発話における用例も参考にしている。

本稿の構成は、大きく I. 音声・音韻、II. 形態・統語と分けるが、各節は通し番号にしている。内容は Zhollam 方言の記述に的を絞り、近縁方言やチベット文語形式との対比という観点からの分析は行わない。なお、形態・統語についてはなお詳細な分析を必要とする部分が少なくない。これについては、稿を改め行うことにする。

I. 音声・音韻

音節構造、超分節音素、母音、子音に分けて述べる。

表記には音標文字を用い、IPA のほか朱曉農(2010)に定義される音標文字と鈴木(2005)で用いられている表記法も断りなく用いる。

なお、ここで記述するのは基本的に壮年層の発話の体系とし、若年層との異なりについては必要に応じて言及する。

2 音節構造

2.1 最大の音節構造

Zhollam 方言の最大の音節構造(分節音の配列)は、鈴木(2005a)を参照して以下のように記述できる。

cC_iGVCC

このうち V(音節核の母音)が必須である。ただし C_i (主子音)が存在しない例は1例に限られるため、 C_iV が基本的な音節の最小構成と見ることができる。なお、Zhollam 方言には ${}^cC_i-$ と CC_i- の対立は認められない。

末子音が2つ続くとき、最後の要素は /ʔ/ である¹⁴。

これに超分節音素として声調が加わって実現される。ただし声調は語単位でかかる場合が多い(3参照)。

¹³ ここに示すように、勺洛村のチベット族は通常チベット名を持たず、漢名のみを持っている。これはチベット名を授ける高僧が村にいないためである。嘎嘎塘村にはチベット寺院はなく、Zhollam 方言に宗教関係の本来語彙がほとんど存在しない。そのような語彙が必要な場合は辞書的説明(「寺」=「本(経)を読むところ」など)が漢語を用いるようである。

¹⁴ 末子音の CC の第1要素は半母音である。そして G(わたり音)の位置にも半母音のみが現れうる。ただし G と末子音 CC は共起しないと見られる(2.2参照)。これらの位置に現れる半母音は母音の一種と解釈し、二重母音を認めるという分析も可能であろう。

2.2 具体例

以下、各種分節音の配列について、それぞれ1つずつ例を掲げる。

^c	C _i	G	V	C	C	具体例	語義
			V			ʼfiɑ ^f ɣ	酔う
	C _i		V			ˉmɑ	これ
	C _i	G	V			ʼp ^h jɑ	悪い
^c	C _i		V			ˉ ^h pɯ	毛
^c	C _i	G	V			ˉ ^h pjɑ	よい
	C _i		V	C		ʼpɑʔ pɑ	皮
	C _i		V	C	C	ˉtɔwʔ	6
	C _i	G	V	C		ˉtɕwəŋ tɕə:	11
	C _i	G	V	C	C	未確認	
^c	C _i		V	C		ˉ ^f naj ˉtɕə	耳
^c	C _i		V	C	C	ˉ ⁿ dɛjʔ	倒れる
^c	C _i	G	V	C		未確認	
^c	C _i	G	V	C	C	未確認	

以上のうち、末子音が単独の/ʔ/または/ŋ/の場合、いくつかの語では末子音自体が脱落し、直前の母音をそれぞれ長母音化または鼻母音化するという現象が確認されている¹⁵（4.2 参照）。

3 超分節音素

3.1 声調とその表記

Zhollam 方言の超分節音素はピッチの高低による声調として実現される。声調パターンとして、以下の4種が認められる。

ˉ : 高平 ˊ : 上昇 ˋ : 下降 ˆ : 上昇下降/中平

上昇下降と中平は1音節語では自由変異であるが、通常中平で現れる語が多い。複音節語では上昇下降のパターンを取る場合が大半である。

声調は語単位でかかるが、最大で2音節を単位とし、3音節以降は低平～中平のピッチで発音され、弁別的でない。まれに各音節が独立した声調パターンをとる例があり、語ごとに決まっている。以上の声調記号は語（または音節）の初頭に付される。

3.2 具体例

以下に1～3音節語の声調の具体的な現れを示す。[] 内には各音節の分節音を S で代表し、その右肩に調値を5段階で表示する。

¹⁵ 若年層では開音節化を好む傾向が認められる。

	高平	上昇	下降	昇降/中平
1 音節語	$\bar{m}\bar{o}$ [S ⁵⁵] 「 2 」	$\acute{m}\bar{o}$ [S ²⁴] 「 人 」	$\grave{m}\bar{o}$ [S ⁵²] 「 (12 の) 2 」	$\hat{m}\bar{o}$ [S ³³] 「 (夢 を) 見る 」
2 音節語	$\bar{f}i\bar{l}u\ m\bar{a}$ [S ⁵⁵ S ⁵⁵] 「 風 」	$\bar{l}o\eta\ b\bar{a}$ [S ¹³ S ⁴⁴] 「 川 」	$\bar{f}i\bar{l}\bar{o}\ d\bar{i}$ [S ⁵⁵ S ³²] 「 教える 」	$\bar{l}u:\ p\bar{y}$ [S ²⁴ S ⁵³] 「 体 」
3 音節語	$\bar{t}\bar{s}^h\bar{u}\ l\bar{o}\? s^h\bar{a}$ [S ⁵⁵ S ⁵⁵ S ²²] 「 貯水池 」	$\bar{f}i\bar{d}\bar{o}\ l\bar{o}\? m\bar{a}$ [S ²⁴ S ⁵⁵ S ²²] 「 石 」	$\bar{f}i\bar{d}\bar{z}\bar{a}\ k\bar{a}\ [\bar{a}$ [S ⁵⁵ S ⁵² S ²²] 「 蜘蛛 」	$\hat{m}\bar{o}\ l\bar{w}\bar{a}\ s^h\bar{a}$ [S ²⁴ S ⁵³ S ²²] 「 混乱する 」

以上に示した調値は、初頭子音によって若干異なりが現れるが、弁別的ではない。声調は型が弁別的に作用すると考えられる。

一方、2音節語において各音節が独自の声調を担う例として、次のようなものがある。

声調パターン	例	語義
下降 + 高平	$\bar{h}k\bar{j}e:\ \bar{m}\bar{a}$	星
下降 + 高平	$\bar{f}i\bar{n}\bar{a}\bar{j}\ \bar{t}\bar{s}\bar{o}$	耳
下降 + 高平	$\bar{h}t\bar{a}\bar{j}\ \bar{f}i\bar{g}\bar{a}$	くるみ
高平 + 上昇	$\bar{k}^h\bar{a}\ \acute{m}\bar{b}\bar{j}e$	話
上昇 + 上昇	$\acute{m}\bar{o}\ \acute{j}\bar{u}\?$	村
上昇 + 上昇	$\bar{l}\bar{o}\ \acute{m}\bar{b}\bar{j}e:$	明日
下降 + 下降	$\bar{n}\bar{a}\ \bar{m}\bar{y}\eta$	あさって
下降 + 下降	$\bar{t}\bar{s}\bar{w}\bar{o}\eta\ \bar{s}^h\bar{o}\eta$	13
下降 + 上昇	$\bar{t}\bar{s}\bar{w}\bar{o}\eta\ \acute{z}\bar{3}$	14

4 母音

Zhollam 方言の母音には、通常母音、咽頭化母音、そり舌化母音が認められ、いくつかの母音にはさらに長短の対立、鼻母音/非鼻母音の対立が認められる¹⁶。

4.1 母音の舌位置および二次的調音の有無で分けた一覧

通常	i	e	ɛ	a	ə	ɜ	ʌ	ɑ	ɔ	o	u	ʉ	ø	ɥ	ʏ	ɪ
咽頭化	e ^ɪ	ɛ ^ɪ	a ^ɪ	ə ^ɪ	ɜ ^ɪ		ɑ ^ɪ	ɔ ^ɪ	o ^ɪ							
そり舌化				ə ^ɻ												

以上のうち、/ɥ/および/ɪ/は出現頻度が極めて低い¹⁷。

調音方法に関して、特に必要とされる音声学的記述は以下の通りである。

¹⁶ 母音に関する詳細な記述は鈴木 (2011) を参照。

¹⁷ /ɪ/は壮年層以上の話者の中にさえただ1つの語にしか現れず、若年層ではその語が漢語によって置き換えられているため、存在しない。

1. 通常母音

- /i/ 初頭子音が歯茎および前部硬口蓋で調音される場合 [i] と発音されることがある¹⁸。それ以外は狭母音の [i] となる。
- /ʌ/ 舌位置は [a] と [ɑ] の中間またはそのやや奥寄りであり、[e] よりも低い。
- /ə/ 初頭子音が歯茎音の場合は [ɹ]、そり舌音の場合は [ɻ]、それ以外では [ə] でそれぞれ発音される。
- /ɜ/ 舌位置は [ɜ] または [ɝ] と [e] の中間もしくはその前寄りの位置になる。
- /ɥ/ 主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであり、舌位置及び唇の形は [ɥ] に相当する¹⁹。初頭子音が鼻音の時は [ŋ] にもなりうる。
- /ɥ/ 主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであり、舌位置及び唇の形は [ɥ] に相当する。
- /ɾ/ 主たる調音部位は後部歯茎における舌尖のふるえである。

2. 咽頭化

咽頭化は母音の二次的調音として実現し、舌根の咽頭壁への接近によって調音される。いくつかの母音では、対応する非咽頭化母音と比べて舌位置を中心に異なりが認められ、以下のようなものがある。

/e, ε, o, ɜ/ 咽頭化の場合、舌位置が若干低くなる。

/a, ɑ, ɔ/ 舌位置はあまり変化がないが、咽頭化すると舌根の緊張が他の咽頭化母音より強まり、場合によって、口蓋垂や喉頭蓋において微弱な摩擦が発生する。

若年層以下の発話では、咽頭化の実現が軽微になることが多い²⁰。

3. そり舌化

そり舌化は母音の二次的調音として実現し、舌尖が後部歯茎～前部硬口蓋へ向けてそることによる、文字通りそり舌化として実現される。

4.2 具体例

以下に非鼻母音の通常母音、咽頭化母音、そり舌化母音の具体例を掲げる。

そり舌化母音は/ɥ/のみ認められ、わずかに数語しかない。/ɾ/は1語にのみ認められる。

	通常母音例		咽頭化母音例		そり舌化母音例
i	ˈpʰi:	半分			
e	ˈkʰeʔ	針	ˈŋkʰeʔ:	生む	
ε	ˈsɛj	金	ˈŋɛʔ:	布	
a	ˈxa kʰa	からす	ˈkʰaʔ	鷹	

¹⁸ 自然な発話速度において、ときどき初頭子音が両唇音の場合にも [i] ~ [ɹ] と発音されることがある。

¹⁹ 若年層以下の/ɥ/の発音はそれ以外の年代のそれと異なりが認められ、その舌位置及び唇の形は丸みを帯びた [ʊ] で、かつ上前歯と下唇の間で形成される摩擦も弱い。

²⁰ ただし初頭子音が/ɦ/の場合は除く。この場合は強い咽頭化が実現される。

ə	˘ ^h zə le:	一昨年	˘ ^h ɪəː	よるしい	˘ ^h pəː	文字
ɜ	˘ ^h zɜ	4	˘ ^h ɪzː	山		
ʌ	˘ ^h kʌ	口				
ɑ	˘ ^h kɑ:	雪	˘ ^h tɑː	森		
ɔ	˘ ^h kɔ: kwʌ	垣	˘ ^h dɔː	難しい		
o	˘ ^h pʰoŋ	木	˘ ^h m ^h oː	奪う		
u	˘ ^h pʰu [u]	木製の椀				
ʉ	˘ ^h pʰʉ:	はぐ				
ə	˘ ^h zə pʰəj	再来年				
ɣ	˘ ^h gɣ	頭				
ɸ	˘ ^h ɸ:	鳥				
ɾ	˘ ^h pɾ	ライオン				

咽頭化母音とそり舌化母音は、次の例を構成する音節において最小対を形成する。

˘^hnaʔ pəː 「雲」 ˘^hpə pə ˘^hbe 「書く」

次に鼻母音の通常母音、咽頭化母音の具体例を掲げる。現段階でそり舌化鼻母音は確認されておらず、/ɜ, u, ɸ, ɾ/の鼻母音もまた確認されていない²¹。咽頭化母音に関しては、/ãː(:)/のみが認められる。以下、参考として末子音/ŋ/を伴う例も添える²²。

	通常鼻母音例	咽頭化鼻母音例	末子音/ŋ/つき母音例
i	˘ ^h tɕ ^h ɪ 家		˘ ^h tiŋ ⁿ dzə 拳
e	˘ ^h tɕ ^h ɛ bʌ 肝臓		˘ ^h deŋ 飛ぶ
ɛ	˘ ^h mjɛ バター		˘ ^h ts ^h ɛŋ 払い戻す
a	˘ ^h pjã 絹製品	˘ ^h tãː 今日	
ə	˘ ^h zə le: 一昨年		˘ ^h tswəŋ tɕə: 11
ɜ			
ʌ	˘ ^h wã 瓦		˘ ^h ɕaŋ 芳しい
ɑ	˘ ^h gwã 卵		˘ ^h pãŋ 太もも

²¹ ただし、これらの母音に末子音/ŋ/が後続する場合は、多くが音声的に鼻母音化する。若年層の発話では末子音/ŋ/が脱落し直前の母音を鼻母音化する傾向にあるため、鼻母音を音素として認める例が増える可能性がある。

また、語によっては年代によって非鼻母音と鼻母音が交替している場合がある。当然ながら自由変異ではなく、個人の発話の中では一定している。

²² 上注に示したことに関連し、若年層の発話でなくとも末子音/ŋ/を伴う例の一部は自由変異として単なる鼻母音として実現されることがある。その場合は便宜的に/ãː(:)/のように記述する。

ただし文法性の高い語については、弱化と考えられる現象により鼻母音化を伴った末子音/ŋ/の脱落、さらに鼻母音化を伴わずに脱落する場合がある。たとえば/k^hɔŋ/（属格標識）や/ŋɔŋ/（動詞句末における目撃証拠性の標識）など。これらの事例では、鼻母音の表示（ãː）を行わない。

ɔ	ʃ̥ō:	箸	ʰnõŋ	天
o	lō ʰmbe:	明日	-ʰdõŋ	顔
u			ʰkũŋ dA ʰpe fiA do	生活
ɬ	ʰtɕũ	着る		
ə	ʃ̥ōj	乗る		
ɣ	ʃ̥ʰə mỹ	爪	-pỹŋ	ひざ
ʔ				
ʀ				

長短については確かに弁別されているが、音声学的な特徴としては注意が必要で、いくつかの長母音は「短母音 + 末子音/ʔ/」と交替するものがある。特に若年層の発話では、壮年層以上で「短母音 + 末子音/ʔ/」で実現されるものが長母音として発音されるものが多くなっている。たとえば、/k^haʃ̥/「鷹」と/k^haʃ̥:/「血」は通常母音の長さによって弁別的であるが、壮年層以上の話者は後者を [k^haʃ̥ʔ] と発音する場合がある。ただし、長母音が声門閉鎖音を伴う事例は未見である。

5 子音

5.1 子音音素一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h			k ^h	
	無声無気	p	t	t̚		k	ʔ
	有声	b	d	d̚		g	
破擦音	無声有気		ts ^h	t̚s ^h	t̚c ^h		
	無声無気		ts	t̚s̚	t̚c̚		
	有声		dz	d̚z̚	d̚z̚		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ̥ ^h	ç ^h	x ^h	
	無声無気		s	ʃ̥̚	ç̚	x	h
	有声		z	ʒ̚	ʒ̚	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ	
	無声	m̚	n̚		ɲ̚	ŋ̚	
流音	有声		l	l̚			
	無声		l̚				
半母音	有声	w			j		

上表には漢語来源語にのみ見られる音は含まれていない。このような音には [f] がある。表記の際には一律/f/を認める。

5.2 具体例

子音は、初頭子音について単子音および子音連続に分けて具体例を挙げつつ考察する²³。

5.2.1 単子音

単子音の具体例は、可能な限り2例ずつ挙げる。

閉鎖音・破擦音

Zhollam 方言は基本的に閉鎖/破擦音に無声有気、無声無気、有声の3系列を有する。ただし、そり舌閉鎖音の系列は無声有気音がなく、声門閉鎖音は/?の1つである。

若年層以下の発音において、そり舌閉鎖音の系列はごく少数の語を除いて歯茎閉鎖音に合流しており、消えかかっている音素であるとえいる。いずれの年代でも、/d/は単独で出現しない。

有声音の系列はいずれも単子音としてはあまり見られない。

	例語	語義	例語	語義
p^h	ˈp ^h aʔ	ふた	ˈp ^h i:	半分
p	ˈpaʔ pa	皮	ˈpi:	チベット人
b	ˈbəj zɛ:	少ない	ˈbe	する
t^h	ˈt ^h ɔŋ	平原	ˈt ^h i: tɕA	鳩
t	ˈtɔ:	毒	ˈti ma	あれ
d	ˈdo ^h dzA	100	ˈme: h ^h lɔ ^h ˈdi	教える
t	ˈtɔwʔ	6	ˈk ^h ə tʰa ^h	恥ずかしがる
q				
k^h	ˈk ^h ɣ	彼/彼女	ˈk ^h ejʔ	世話をする
k	ˈkoŋ	価格	ˈkeʔ pa ˈbe	訴える
g	ˈgɣ	分かち合う	ˈgɕ:	ボタン
ʔ	ˈʔA ma	母	ˈt ^h o: ˈʔoʔ	収穫する
ts^h	ˈts ^h ə	犬	ˈts ^h ej	関節
ts	ˈtsə ˈtsə ˈbi	探す	ˈtse ts ^h ə: ʂ ^h əŋ	暗い
dz	ˈdzə	揉む	ˈji dzə	本
tʂ^h	ˈtʂ ^h a:	雨	ˈtʂ ^h e:	破れる
tʂ	ˈtʂə my	トカゲ	ˈtʂe: də mə	医者
dʒ	ˈdʒə:	重い		
tɕ^h	ˈtɕ ^h a ^h :	埃	ˈtɕ ^h i ^h pa	時間
tɕ	ˈtɕA:	お金	ˈtɕi:	声
dʒ	ˈdʒɛ tej	外側	ˈdʒi: tʂu	80

²³ 末子音としては、/?、ŋ、w、j/およびその組み合わせのみが認められるため、特にここでは議論しない。

摩擦音

Zhollam 方言は基本的に摩擦音に無声有気、無声無気、有声の3系列を有する。ただし、声門摩擦音には無声有気音がない。/h/は単独で出現しない。

若年層の発話では、しばしは/ç^h, ç, z/と記述される音が/i, ə/の前で [s^h, s, z] と発音されることがある。

/fi/と咽頭化母音が共起するとき、/fi/は咽頭摩擦音 [ʃ] として実現されることが多く、特に若年層の発話ではいっそうその傾向にある。

	例語	語義	例語	語義
s ^h	`s ^h A	土	ˉs ^h eŋ	肥えた
s	˘sA	食べる	˘sēj	ごはん
z	ⁿ dze zA	輪廻	˘zi:	露
ʃ ^h	˘p ^h u ʃ ^h A	松茸	˘ʃ ^h e ŋi	肉
ʃ	˘ʃA fi du?	歌		
z _l	˘zɔ	4		
ç ^h	˘h ^t soŋ ˉç ^h u?	ほうき		
ç	˘çA	鶏	˘çu wA	ねずみ
z	˘h ^t çei: ˉzA	テント	˘me zi	シャツ
x ^h	˘x ^h oŋ	なだめる	˘noŋ ˉx ^h u x ^h u	近所
x	ˉxa ^ɸ :	裂く	ˉxĩ	得る
ɣ	˘pɔ ɣɔ	おすぶた	˘je ɣə	回復する
h				
fi	˘fiA ^ɸ :	家畜小屋	˘fiō fiō	こうもり

共鳴音

Zhollam 方言は基本的に鼻音/流音に無声、有声の2系列を有し、半母音には有声の系列のみが認められる。ただし、そり舌流音には無声音がない²⁴。

/ŋ/は/A/との組み合わせにのみ認められる。/l/は語中にのみ認められる。

	例語	語義	例語	語義
m	ˉmA	これ	˘me ʃu?	ふもと
m̥	˘h ^t ō ˘m̥A ˘m̥ĩ	違反する	ˉm̥ĩ	薬
n	˘nA	痛む	˘nej? pA s ^h oŋ	疑う
ŋ	˘ŋA	鼻	ˉŋoŋ	である

²⁴ 特に注意すべきは、Zhollam 方言には/r/と記述される音が存在しないことであろう。若年層の一部の発話では、/l/がそり舌接近音 [ɺ] で現れることがまれに見受けられる。

ɲ	´ɲA	魚	´ɲi:	ない
ɲ̃	ˉɲi jǎ	追いかける	ˉɲi mA	竹
ŋ	´ŋA	私	ˆŋA	刈る
ŋ̃	ˉŋõ	炒める	ˉŋẽ ʰgo	おもての
l	´laʔ pA	腕	ˆli: bi: mə	農民
l̥	ˉlA	編む	ˉʔA loŋ	鏡
ʎ	ˆʰdzA kA ʎA	蜘蛛	ˉtoŋ ˆdo: ʎi	暇な
w	´wãʰ	角(つの)	ˉʰdeŋ ʰdeŋ we ˉde	飛行機
j	ˉjaʔ	タバコ	ˉju ju	ノート

5.2.2 子音連続

Zhollam 方言に見られる子音連続の組み合わせは比較的多いが、その組み合わせには大きく分けて主たる子音に先行する前鼻音と前気音、そして主たる子音に後続するわたり音に分けられる。わたり音と前2者は独立しているため、最大で3子音連続が認められる。また、基本的に前鼻音・前気音と主たる子音の間の有声性は一致する。

以下に子音連続の組み合わせを基準に分類して具体例を掲げる。

前鼻音

前鼻音は有声および無声無気閉鎖・破擦音および一部の流音に先行し、調音位置および有声性において一致するのが基本である。

有声音に先行するもの

- ^mb** : ˉ^mbə 稲
- ⁿd** : ˉⁿdɛ ʰbA 泥
- ^ɲd** : ˉ^ɲdɔ: 鬼
- ^ŋg** : ˉ^ŋgy 頭
- ⁿdz** : ˉⁿdzõ bA 橋
- ^ɲdʎ** : ˉ^ɲdʎɔ: 納西族
- ⁿdʒ** : ˉʔA ˉⁿdʒe 皆
- ⁿl** : ˉⁿlɛ: ˉ^hkaj bo 月(天体)

無声有気音に先行するもの

- ^mp^h** : ˉ^mp^hɛ k^hu 夫
- ⁿt^h** : ˉⁿt^hõ tɛj 高い
- ^ŋk^h** : ˉ^ŋk^hɔ: nõ 胆嚢
- ⁿts^h** : ˉⁿts^hA: 繕う

$\acute{h}t_s^h$: $^{-}\acute{h}t_s^h\tilde{e}$ bA 肝臓
 $\acute{h}t_c^h$: $^{-}\acute{h}t_c^h\alpha$: kA 寒い

前気音

前鼻音は各種無声無気音および有声音に先行し、有声性において一致するのが基本である。
無声有気音に先行するもの

$^h p$: $^{-}^h p\alpha?$ きつね
 $^h t$: $^{-}^h t\alpha?$ 虎
 $^h t$: $^h t\theta$ mA 米
 $^h k$: $^{-}^h k\theta$: mA 泥棒
 $^h t_s$: $^{-}^h t_s\alpha$ 根
 $^h t_s$: $^{-}^h t_s\theta$ 舌
 $^h t_c$: $^{-}^h t_c\theta$: 酢
 $^h s$: $^{-}^h s\theta\eta$ to η 線香
 $^h x$: $^{\cdot}j\epsilon$ $^h x\theta$: ゆるめる
 $^h l$: $^{-}^h l\theta\eta$ 靴

有声音に先行するもの

$^{\acute{h}} b$: $^{\acute{h}} b\theta$: $k^h\gamma$ 空気
 $^{\acute{h}} d$: $^{-}\acute{h} d\theta\eta$ 顔
 $^{\acute{h}} d$: $^{\acute{h}} d\theta$ 腫れ物が大きくなる
 $^{\acute{h}} g$: $^{-}\acute{h} g\theta\eta$ 肩、背
 $^{\acute{h}} dz$: $^{-}\acute{h} dz\epsilon$ mA フライパン
 $^{\acute{h}} d_z$: $^{\acute{h}} d_z\alpha$ $^{\acute{h}} d_z\alpha$ be 狭い
 $^{\acute{h}} d_z$: $^{\acute{h}} d_zi$: 8
 $^{\acute{h}} z$: $^{-}\acute{h} z\theta\eta$ とらえる
 $^{\acute{h}} z$: $^{\acute{h}} z\theta w$ 剃る
 $^{\acute{h}} z$: $^{\cdot}j\alpha$ $^{\acute{h}} z\theta$ じゃがいも
 $^{\acute{h}} m$: $^{-}\acute{h} m\alpha$ $^{\acute{h}} m\alpha$ 階下
 $^{\acute{h}} n$: $^{-}\acute{h} n\epsilon j$ mA 息子の嫁
 $^{\acute{h}} \eta$: $^{-}\acute{h} \eta i?$ 目
 $^{\acute{h}} \eta$: $^{-}\acute{h} \eta\alpha$ 5
 $^{\acute{h}} l$: $^{-}\acute{h} l\alpha j$ 読む
 $^{\acute{h}} w$: $^{-}\acute{h} w\tilde{\alpha}$ 派遣する
 $^{\acute{h}} j$: $^{-}\acute{h} j\theta$: $^{\acute{h}} j\theta$: $^{\cdot}bi$ 居眠りする

わたり音

わたり音には/w/と/j/が認められる。

/w/をもつもの

- t^hw** : ˈt^hwɛː 首領
- k^hw** : ˈk^hwɑː パン
- kw** : ˈkwa 囲い込む
- tsw** : ˈtswəŋ tswəː 11
- sw** : ˈswẽ tsə 孫息子
- ɕw** : ˈɕwɑ 帽子
- z^hw** : ˈz^htswɑː ˈz^hwɛ dɑ 噛む
- ɕw** : ˈto ɕwã つるす
- z^hw** : ˈpja ˈpja de ˈz^hwɑ ɕɛː 固い
- xw** : ˈke xwa 白い
- ɣw** : ˈmbɔ ɣwɑ 下る

/j/をもつもの

- p^hj** : ˈp^hjaː pɣ 傷つく
- pj** : ˈtɕ^hɑː pje ˈma ˈpja 水害
- t^hj** : ˈmẽ t^hjaw 麵
- tj** : ˈta lo ˈtɕɑʔ tjeː 蹄鉄
- k^hj** : ˈne k^hje 先端
- kj** : ˈʔɑ kja^ɿ 節目
- ɕj** : ˈɕjã de 休む
- mj** : ˈmjẽ バター
- lj** : ˈs^hə lja ˈni ˈs^hə ˈzɛː 証明する

3 子音連続

- mbj** : ˈk^hɑ ˈmbje 話
- hkw** : ˈhkwɔ 掘る
- ^hgw** : ˈ^hgwã 卵
- htsw** : ˈhtswɑ 草
- htsw** : ˈhtswɑː ˈz^hwɛ dɑ 噛む
- ^hqzw** : ˈ^hqzwa 蚤
- hpj** : ˈhpja よい
- hkj** : ˈhkje かぶせる

II. 形態・統語

名詞、代名詞、数詞・量詞、形容詞、動詞、複文と動詞句の埋め込みに分けて述べる。格標識は名詞の項で、動詞句周辺の接辞は動詞の項で扱う。

適宜具体例を挙げつつ記述を行う。語釈つき例文には通し番号を与える。

6 名詞

6.1 形態

単音節語、2音節語が多い。派生語や複合語の場合、3音節や4音節で1語になっているものもある。

1. 単音節語

ˈmbu「光」_⊎ ˈkʰɑː「雪」_⊎ ˈsʰy「齒」_⊎ ˈloː「羊」

2. 2音節語

ˈɲi ma「太陽」_⊎ ˈʔa ma「母」_⊎ ˈpə loŋ「おす牛」_⊎ ˈhiː tɕa「鳩」

3. 3音節語

ˈfi dʒa ka ɭa「蜘蛛」_⊎ ˈzɛː sə tʰoŋ「虹」_⊎ ˈfi do loʔ ma「石」

4. 4音節語

ˈɲi ma le le「蝶」_⊎ ˈɲi ma xwa xwa「ひまわり」_⊎ ˈɫdɔː ɲi pʰo mā「悪魔」

派生語や複合語では、声調が1つになっているものが多いが、一部の語ではもとの語（形態素）の個別の声調を残しているものも見られ、たとえばˈtsʰə ˈmā「めす犬」_⊎ ˈh tA ˈtʰoŋ「子馬」などがある。

6.2 名詞化標識

頻繁に見出される名詞化標識には、/dA/と/mə/がある。前者は「こと・もの・人」の意味になり、後者は「人」の意味を表す。両者とも生産的であり、また弁別的な声調を担わない。ほかに/sʰA/「場所・道具」も見かけるが、生産的ではないようである。

名詞化される品詞は多く動詞または形容詞である。これらが1音節語の場合、名詞化標識がつく場合に語幹を重複させることが多い²⁵。代名詞および人名に/dA/がつくと、「～の家」の意味をもつ（7.1参照）。

名詞化前	名詞化後
ˈsA「食べる」	ˈsA sA dA「食べ物」
ˈnʰoŋ「飲む」	ˈnʰoŋ nʰoŋ dA「飲み物」
ˈsɛj ˈzɥ「ごはんを作る」	ˈsɛ zɥ mə「ごはんを作る人、料理人」
ˈtʰɥ ˈloː「水を入れる」	ˈtʰɥ loː sʰA「瓶」

²⁵ 語幹の重複の有無による語義の異なりは、名詞化については不明である。なお、重複語幹に名詞化標識がつくとき、両者の間に/ɸA/が挿入されることもある。

上の「瓶」のように、複数の項を伴う節も名詞化することができる。

- (1) ʔca mə ʔtɕʰuʔ-φ ʰtsy:-mə-φ-de ʔkwɔ̃-φ ʔnoŋ
 さっき 2-[絶] 探す-[名]-[絶]-[主] 誰-[絶] [判]
 さっきあなたを探していた人は誰ですか？

また、名詞化要素は修飾句になることができ、その際修飾句は被修飾語（句）の直前に特別な標識を伴うことなくおかれる。

- (2) ʔkʰɛ tsə ma ʔtɕʰuʔ-φ ʔswa-wə-da ʔca-φ ʔto: ʔjuʔ-noŋ
 昨日 2-[絶] 殺す-[現在完了]-[名] 鶏-[絶] ここ [存]-[証]
 昨日あなたが殺した鶏はここにいます。

6.3 格標識

Zhollam 方言は、文法格として行為者をマークする能格型の格体系を持つ。

6.3.1 一覧表

形式	S/A/P 標示	非 S/A/P 標示
無標 (φ)	絶対格	位格
je	能格	具格
lɔ̃	与格	与格/位格
kʰɔŋ / kɜ		属格
je / ka		具格
nɔ̃		内格
ne: / de		奪格
de		比較格

以上のうち、能格/具格および与格/位格はそれぞれ形態的に同一のものとして実現されうる。ただし格の機能、そして格標識の脱落の可否において異なるため、分離して扱う。

一方、絶対格は無標であり、例文中に φ で示す。また位格もしばしば音形が省略され、絶対格と区別ができなくなるが、文中での役割が異なっている。以下の例文において、音形式の認められない位格は一律表示しない²⁶。

6.3.2 用法

以下、文法格 (S/A/P 標示)、非文法格 (非 S/A/P 標示) の順に、簡潔に用法を記述する。

²⁶ 時間 (/ʔtãʔ:/「今日」, /ʔca mə/「さきほど」など)・空間 (/ʔh toŋ tej/「上」, /ʔm bə zɛj/「下」など)を表す語は、品詞としては名詞の一種と考えられるが、格標識を伴わない形式は通常意味上は位格として用いられると考え、絶対格の標示を行わない。

文法格：絶対格

絶対格の役割としては、判断動詞の主語および補語、存在動詞の主語および所有者、自動詞の主語、他動詞の目的語（被動者）、他動詞の主語（行為者）などがある。

判断動詞の主語および補語

- (3) ʼŋA-φ ʼpi:-φ jĩ
 1-[絶] チベット人-[絶] [判]
 私はチベット人です。

存在動詞の主語および補語

- (4) ʼŋA-φ ᵐpʰɑ:-φ ʼjuʔ
 1-[絶] ぶた-[絶] [存]
 私はぶたを持って（飼って）います。

自動詞の主語

- (5) ʼtʂʰɑ:-φ ʼpje-do
 雨-[絶] 降る-[進行]
 雨が降っています。

他動詞の被動者

- (6) ᵐtʂʰuʔ-φ ᵐma ᵐdzĩ-φ ᵐlēj ᵐgy-tʂoʔ
 2-[絶] これ 服-[絶] 持つ 行く-できる
 あなたはこの服を持って行ってよいです。

他動詞の行為者

- (7) ʼŋA-φ ʼkəʂ:-φ `ceʔ-da-jĩ
 1-[絶] ナイフ-[絶] 使う-[状態]-[判]
 私はナイフを使っています。

文法格：能格

能格は他動詞の主語（行為者）を示すが、義務的に用いられるわけではなく、行為者を強調したい場合に特に用いられる傾向にある。ただし行為者が被動者より後に来る場合²⁷は、ほぼ義務的に用いられる。

行為者が被動者の前にある場合

- (8) ʼŋA-je ᵐkʰwɑi:-φ ᵐpaʂ:-pə-ʂe:
 1-[能] 碗-[絶] 割る-[現在完了]-[意思]
 私が碗を割ってしまいました。

行為者が被動者より後に来る場合

²⁷ この語順の場合、日本語では受け身で訳すほうが意味的に近いと考えられる。

- (9) ʼnēj-φ ʼpə lɔŋ-je ʼsa-pə-tʰũ-ŋɔŋ
小麦-[絶] 牛-[能] 食べる-[現在完了]-[達成]-[証]
小麦は牛が食べてしまいました。

行為者のみが発話に現れる場合

- (10) ʼkʰɣ-{je/φ} ʰtsoŋ-dA-φ ʼjĩ
3-{{[能]/[絶]}} 売る-[名]-[絶] [判]
(これは) 彼が売ったものです。

文法格：与格

文法格としての与格は、一部の他動詞の被動者および感情の向く対象を示す際に用いられるが、この場合の与格は義務的ではない。一方で使役文における被使役者を標示する際に用いられる場合、与格は義務的である。使役文における動詞が自動詞でも他動詞でも、被使役者は与格で標示される。

他動詞の被動者

- (11) ʼŋA-φ ʼtɕʰuʔ-{lɔ̃/φ} ʰdɔŋ
1-[絶] 2-{{[与]/[絶]}} たたく
私はあなたをたたきます。

感情の対象

- (12) ʼla my-φ ʰŋA-{lɔ̃/φ} ʰi gA-ʰi gA-ŋɔŋ
[人名]-[絶] 1-{{[与]/[絶]}} 愛する-[重]-[証]
ラモは私を好きなようです。

使役文における被使役者

- (13) ʼkʰɣ-φ ʼŋA-lɔ̃ ʼtʰə tsʰə ʰɕʰoʔ-so
3-[絶] 1-[与] こちら 来る-させる
彼は私にこちらに来させます。
- (14) ʼŋA-φ ʼkʰɣ-lɔ̃ ʼsēj ʰsa-tɕoʔ
1-[絶] 3-[与] ごはん 食べる-させる
私は彼にごはんを食べさせます。

非文法格：属格

属格は所属、属性を表す際に用いられる。強形と弱形がある。

- (15) ʰŋA-kʰɔŋ pʰa:
1-[属] ぶた
私のぶた

また一方で、属格強形で終わる句は、「～のもの」という名詞句を形成することができる。

- (16) ʼte ma ʰmə-kʰɔŋ
あれ 人-[属]
あの人のもの

- (17) `ma-de `ŋA-k^hɔŋ ʔjĩ `k^hɣ-k^hɔŋ ʔmẽ
 これ-[主] 1-[属] [判] 3-[属] [判/否]
 これは、私のものであって彼のものではありません。

非文法格：具格

具格は道具、手段、材質および原因を示す際に用いられる。能格標識と共通の形態を用いるほか、道具を表す場合に具格専用の形式が認められる²⁸。なお、具格は基本的に無生物につくが、無生物の行為者と解釈すれば、能格的役割を担っていると解釈できなくもない。

道具

- (18) ʔŋA-φ `kəʔ:-{je/ka} ʔjo ma-φ `fiŋa-da-ʔĩ
 1-[絶] ナイフ-[具] 野菜-[絶] 切る-[状態]-[判]
 私はナイフで野菜を切っているところです。

材質

- (19) ʔma-φ `s^hẽj-je ʔzɯ-ŋɔŋ
 これ-[絶] 木-[具] 作る-[証]
 これは木でできています。

原因

- (20) ʔfi lo ma-je ʔpej tsə-φ `fi da-pə-ts^hi:
 風-[具] コップ-[絶] 倒れる-[現在完了]-[達成]
 風でコップが倒れました。

なお、行為者の能格標識と具格が共起する場合、具格の形式はほぼ/ka/に限定される。

- (21) ʔti ma `ɕaŋ dzə-φ `fi do fi dzi-je `h[tsaʔ-ka `fi dɔŋ-fiA-ŋɔŋ
 あれ 箱-[絶] [人名]-[能] 鉄-[具] 打つ-[不確定]-[証]
 この箱は、ドジが鉄を用いて打って作りました。

非文法格：与格

非文法格としての与格は、受益者・受領者および行為の向かう先を示す際に用いられるが、この場合の与格標識は省略されない。

受益者・受領者

- (22) ʔŋA-φ ʔma-φ `tɕ^hɯʔ-lõ ʔhte:
 1-[絶] これ-[絶] 2-[与] 与える
 私はこれをあなたにあげましょう。

行為の向かう先

- (23) ʔŋA-φ `tɕ^hɯʔ-lõ ʔsə: te: ʔbe
 1-[絶] 2-[与] 話す
 私はあなたに話しましょう。

²⁸ 形式の異なりによる意味の相違は不明である。

非文法格：位格

位格は無標の位置を示す。文意が明快な場合はあまり用いられず、しばしば絶対格として現れる。

- (24) ʼŋA-φ ʼmjē-φ -^hdza ma-lō ʼʃwe-de-nōŋ
1-[絶] バター-[絶] 鍋-[位] 溶かす-[状態]-[証]
私はバターを鍋で溶かしています。

非文法格：内格

内格は囲まれた空間における位置を表す。例によっては位格による表示も可能である。

- (25) ʼpej tsə-{nō/lō} -[ʃ^hu-φ ʼjuʔ-nōŋ
コップ-{[内]/[位]} 水-[絶] [存]-[証]
コップの中に水があります。

非文法格：奪格

奪格は時間・空間の起点を表す。奪格標識には2つの形態が認められるが、意味上の異なりは不明である。

- (26) -^hɣ-φ -^hdza nōŋ-ne: ʼfioŋ-nōŋ
3-[絶] [地名]-[奪] 来る-[証]
彼は維西県城から来ました。
- (27) -^hɣ-da-de ʼɕwe ɕaw ʼt^haʔ-nōŋ
3-[名]-[奪] 学校 遠い-[証]
彼の家から学校は遠いです。

非文法格：比較格

比較格は比較対象を表し、起点を示す場所格の一種と考えられる。

- (28) ʼŋA-φ ʼtɕ^huʔ-de -[ʃ^hə
1-[絶] 2-[比] 大きい
私はあなたより大きいです。

7 代名詞

人称代名詞、指示詞、疑問詞類に分けて述べる。

7.1 人称代名詞

人称代名詞は、人称と数が区別される。

人称	単数	複数	双数
1	ʔA	ʔA dzẽ ^h dze	ʔA dzẽ mə [包括] ʔA gɥ mə [排除]
2	ʔtɕ ^h ʔ	ʔtɕ ^h a: mə	
3	ʔk ^h ɥ	ʔk ^h ɥ na mə	

「性」は区別されない。「双数」は1人称にのみ認められ、かつ包括形と排除形の区別も行われる。「敬称」は認められない。

格標識などを伴うときに形態変化を伴うことは基本的に認められないが、名詞化接辞/dA/および属格弱形/k3/を伴うときは2人称単数に母音交替が生じ、/ʔtɕ^hʔ-dA/「あなたのところ(家・家族)」や/ʔtɕ^hʔ-k3/「あなたの～」のようになる。前者の形式はときどき/ʔtɕ^hʔ/となる。

7.2 指示詞(修飾形式を含む)

指示詞は近称と遠称の区別があり、事物と場所の異なる系列がある。

	近称	遠称
事物	ʔmA / ʔnɔ li	ʔto pe tɕj / ʔti ma
場所	ʔna kA	ʔto:

複数の事物を示す形式に、ʔnɔ x^hə x^hə「これら」、ʔa le^hkA「あれら」がある。

指示詞は代名詞の機能と形容詞の機能を兼ねる部分がある。指示形容詞として用いる場合、/ʔmA/「この」と/ʔto:/「あの」が修飾対象の名詞に前置される。指示形容詞は独立の声調を持つ。また、これが単なる指示形容詞として用いられるときに後置される例は認められない。

/ʔmA/を指示代名詞として主語とするとき、主題標識/de/²⁹を伴うのが通例である。

- (29) ʔmA-φ-de ʔp^hʔ [ɥ:φ ʔnɔŋ
 これ-[絶]-[主] 子ぶた-[絶] [判]
 これは子ぶたです。

7.3 疑問詞類(形容詞・副詞も含む)

ʔkwɔ̃ / ʔkɔ̃ 「誰」

ʔkA de 「何」、ʔkA dɛ: 「何の、どんな」

ʔk3 lej 「どこへ」、ʔk3j le / ʔk3 lej 「どこで、どこに」、ʔk3 lej ne: 「どこから」

ʔko dzu lej / ʔkA le^hpA mə / ʔkA le ʔkA^hpA / ʔkA le^hpɥ: 「いつ」

ʔk3 dɛ 「どう(する)」

ʔkə zo 「どのような方法で」

ʔkA ze / ʔkə zɛ / ʔkə zɛ [sə] 「どれぐらい、いくら」

「なぜ」は漢語形式^hwej sɛ̃ m3 を用いる。

²⁹ 主題標識は、名詞句に後続し(格標識を伴う場合は格標識に後続)、そのあとに若干のポーズを置くことで、先行する名詞句を焦点化する役割を担う。通常は文の第1名詞句につく。形式は尊格・比較格標識と共通である。

複数のものについて尋ねる場合、疑問詞を重複させて表すことができ、その場合疑問詞はそれぞれ声調を担う³⁰。

- (30) ˈtʃʰɑʔ-dɑ ˈkwɔ̃ ˈkwɔ̃ ˈjuʔ-ŋɔŋ
 2-[名] 誰 誰 [存]-[証]
 あなたの家族はだれだれがいますか？

8 数詞・量詞

8.1 基数詞

以下に 1 から 29 までの形態を示す。

		+10	+20
0	ˈtʃʰu	ˈni ʃʰu	
1	ˈtʃʰə:	ˈtʃʰwəŋ tʃʰə:	ˈni ʃʰu ˈtʃʰə:
2	ˈmə	ˈtʃʰwəŋ ˈmə	ˈni ʃʰu ˈmə
3	ˈsʰoŋ	ˈtʃʰwəŋ ˈsʰoŋ	ˈni ʃʰu ˈsʰoŋ
4	ˈzɜ	ˈtʃʰwəŋ ˈzɜ	ˈni ʃʰu ˈzɜ
5	ˈfiŋA	ˈtʃʰwəŋ ˈfiŋA	ˈni ʃʰu ˈfiŋA
6	ˈtɔwʔ	ˈtʃʰwəŋ ˈtɔwʔ	ˈni ʃʰu ˈtɔwʔ
7	ˈfi dē	ˈtʃʰwəŋ ˈfi dē	ˈni ʃʰu ˈfi dē
8	ˈfi dzɪ:	ˈtʃʰwəŋ ˈfi dzɪ:	ˈni ʃʰu ˈfi dzɪ:
9	ˈfi gɥ	ˈtʃʰwəŋ ˈfi gɥ	ˈni ʃʰu ˈfi gɥ

「6」「16」「26」の若年層の形式はそれぞれ/ˈtɔwʔ/、/ˈtʃʰwəŋ ˈtɔwʔ/、/ˈni ʃʰu ˈtɔwʔ/となる。20台の数は「20 + 1の位」で表し、「30」以降のきりの悪い数字も20台と同様の構成をとる。30から100までのきりのよい数は以下のようになる。

- ˈsʰē tʃʰu 「30」
- ˈfi zɜ tʃʰu 「40」
- ˈne tʃʰu 「50」
- ˈtɔ: tʃʰu 「60」
- ˈfi dē tʃʰu 「70」
- ˈdzi: tʃʰu 「80」
- ˈfi gɥ: tʃʰu 「90」
- ˈdo ˈfi dzɜA 「100」

「100」から「199」までは「100 + 各種2けたの数」を並列して構成する。「200」は/ˈmə ˈfi dzɜA/となり、「1000」は/ˈtʰej ˈtʃʰə:/である。これより大きい数は漢語を用いる。

若年層では、数詞においてチベット語形式を用いるのは1から10までのみのことが多く、それ以上は通常漢語を用いる。量詞との組み合わせにより、1けたの数でも漢語を用いることがある。

³⁰ それゆえ、疑問詞の重複は動詞や形容詞に見られる文法化した重複と異なるものとする。

8.2 量詞

量詞は大きく類別詞と度量衡の単位に分けられるが、いずれも Zhollam 方言の本来語彙は少なく、度量衡の単位は漢語をそのまま用いることが多い。類別詞はあまり用いられず、直接名詞と数詞を並列する例が相当数ある。

本来語の類別詞には/ⁿdo/「個」が認められる³¹。語順は類別詞の場合「名詞+量詞+数詞」で、度量衡の単位の場合「名詞+数詞+量詞」となる。類別詞が何らかの容器による単位を表す場合、「1」は/^koŋ/が用いられる。

- (31) ʼməⁿdo-{{tʃə:/mə}} (または ʼmə-ⁿdo-{{tʃə:/mə}})
人 [量]-{1/2}
1人の人/2人の人
- (32) ʼʃwi t^hoŋ ʼje-kəŋ
水桶 [量]-1
(水)1桶
- (33) ʼtɕA: ʼji-k^hWAj
お金 1-[量]
1元

9 形容詞

Zhollam 方言において、形容詞は状態を表す動詞と考えることができるが、名詞を修飾する構造が形容詞に独特であるので、ここで述べる。

9.1 形態

形容詞の形態としては、以下のようなものが代表的である。

1. 1音節語幹

^hpjA「よい」_⊃、^hpjA「悪い」_⊃、^htʃə「大きい」

2. 1音節語幹の重複

tʃ^hoŋ tʃ^hoŋ「小さい」_⊃、^hma^h ma^h「低い」_⊃、kō kō「満ちた」

3. 2音節語

ʼA dzi「大きい」_⊃、ʼA mi「小さい」_⊃、^hke xWA「白い」_⊃、^hsej pA「新しい」

2音節語のいくつかの形容詞も重複することが可能であるが、動詞の修飾など副詞的な用法になることもある。/^hla ma^h ^hla ma^h/「急いで」や/^hsa ma^h ^hsa ma^h/「こっそりと」など³²。

なお、少数の語では音節数が自由に変わることがある。/^hdo^hʃ:, ^hdo^h ɣɔ/「つらい」など。

³¹ この形式は先行する名詞が1音節語の場合、名詞と1つの声調範囲を構成することもある。

³² 重複部分が声調を持つかどうかはゆれがある。

9.2 用法

文中で修飾語として用いられる場合、形容詞は被修飾名詞に後置されるのを基本とする。その際、形容詞には /^hma/ が後続しうる。これはおそらく近称の指示代名詞に由来する要素³³で、名詞句の末尾を指示しかつ格標識・主題標識が後続しうる。

- (34) ^hpej tsə ^h?A dzi ^hma-^hde ^hŋA-k^hoŋ ^hji
 コップ 大きい これ-[絶]-[主] 1-[属] [判]
 大きいコップは私のです。

形容詞の名詞化は接尾辞 /nə/ を用いる。

- (35) ^hŋA-^h ^h?A mjẽ-nə-^h ^hni-^hdu:
 1-[絶] 小さい-[名]-[絶] [否]-必要である
 私は小さいのは必要ないです。

一方、形容詞は動詞を伴わず、特別な形態的手続きなしで述語になることができる。その際には、動詞の項で触れる各種接辞類が形容詞語幹に直接つくことができる。重複語幹にもつくが、1音節語幹の状態に接辞がつく場合も見られる。

- (36) ^hma ^hdzi-^h ^hma-^h[s^hə-ŋoŋ]
 これ 服-[絶] [否]-大きい-[証]
 この服は大きくありません。

「もっとも～」を表すには、形容詞の直前に /^htsuj/ (漢語の「最」) を置く。

10 動詞

動詞の分類、動詞を取り巻く接辞、動詞連続、使役・態に分けて述べる。

10.1 分類

動詞は述語動詞と本動詞に分けることができる。

10.1.1 述語動詞

述語動詞³⁴には、判断動詞と存在動詞がある。前者の肯定の形式は、単独用法のほかに動詞句末に接辞として置かれ、動詞句を形成する役割がある。

判断動詞および存在動詞の一部には、語幹そのものに肯定と否定の2種がある。以下に一覧表を掲げる。

³³ 語釈には「これ」と書くが、必ずしも近称の指示を表しているわけではない点に注意が必要である。また、この要素は声調を担うのが通例である。

³⁴ Zhollam 方言における述語動詞のより詳細な記述は Suzuki (2010) を参照。

	肯定	否定
判断動詞	ʼjĩ	ʼmẽ
	ˉnɔŋ	ʼmi-nɔŋ
存在動詞	ˆjuʔ	ˆneʔ
	ˉnɔŋ	ˆma-nɔŋ

判断動詞の/ʼjĩ/と/ˉnɔŋ/の使い分けは、後者が特に発話の場とは関連のない3人称について現れ、それ以外は基本的に前者が用いられる³⁵。

- (37) ʼŋA-φ ʼpi:-φ ʼjĩ
 1-[絶] チベット人-[絶] [判]
 私はチベット人です。

- (38) ˆma-φ-de ˉpʰa:-φ ˉnɔŋ
 これ-[絶]-[主] ぶた-[絶] [判]
 これはぶたです。

存在動詞については、語幹の異なる/ˆjuʔ/と/ˉnɔŋ/のほかにも、前者に接尾辞を伴う種々の形式が存在する。前者は主に所有の意味に用いられ、後者は発話者が目撃して知っている3人称の存在を表す³⁶。

- (39) ʼŋA-φ ˉpʰaʔ ʔu:-φ ˆjuʔ
 1-[絶] 子ぶた-[絶] [存]
 私は子ぶたを持って(飼って)います。

- (40) ˉto: ˉpʰa:-φ ˉnɔŋ
 あそこ ぶた-[絶] [存]
 あそこにぶたがいます。

なお、本動詞/ʼsɔ:/「いる」も意味的に存在表現として用いられる³⁷。

- (41) ʼŋA-φ ˉtɕʰoŋ ʼsɔ:-dA-jĩ
 1-[絶] 家 いる-[状態]-[判]
 私は家にいます。

なお、述語動詞の場合の完全疑問文は、判断動詞の/ˉnɔŋ/を除き疑問接頭辞/ˉʔa/を付加して形成することができる。判断動詞の/ˉnɔŋ/は疑問接尾辞/ʼmẽ/を用いて疑問文を形成する(10.2.2参照)

- (42) ˆma-φ-de ˉpʰa:-φ ˉnɔŋ ʼmẽ
 これ-[絶]-[主] ぶた-[絶] [判] [疑]
 これはぶたですか？

³⁵ 判断動詞の用例については、例文(1),(10),(17),(34)も参照。

³⁶ 存在動詞の用例については、例文(2),(25)も参照。

³⁷ /ʼsɔ:/「いる」を本動詞とするのは、たとえば(41)のように存在動詞にはつかないいくつかの動詞接辞の付加ができることによる。

- (43) ˩to: ˩pʰa:-φ ˩ʔa-nɔŋ
 あそこ ぶた-[絶] [疑]-[判]
 あそこにぶたはいますか？

10.1.2 本動詞

動詞の形態としては、次のようなものが代表的である。

1. 1音節語幹

˩tʰɔŋ「飲む」, ˩zɯ「作る」

2. 重複語幹 + ˩bi / ˩be「する」

˩dɔŋ ˩dɔŋ ˩bi「殴る」, ˩pəː pəː ˩bi「書く」

3. 名詞 + ˩bi / ˩be「する」

˩sɔŋ ne ˩be「なぞかけをする」, ˩mʰo lo ˩be「揺する」

「名詞 + ˩bi / ˩be」型の名詞部分には漢語の動詞がそのまま挿入されることがある。

本動詞の語幹自体は無変化である³⁸。しかしながら、語幹自体の重複が認められる。非重複形との語義の差異は語によって異なるが、行為の弱め（ちょっと～する）、行為の反復（何度も～する）および相互の行為（～し合う）のいずれかになることが多い。

また、動詞の要求する項の数とその格標示の観点から、次のような分類が可能である。

1. 自動詞（主語は絶対格；形容詞の述語用法もここに含まれる）

˩gy「行く」, ˩fioŋ「来る」

2. 他動詞（行為者は能格か絶対格、被動者は絶対格）

˩tsoŋ「売る」, ˩pəː「書く」

3. 他動詞（行為者は能格か絶対格、被動者は与格か絶対格）

˩dɔŋ「殴る」, ˩dejʔ「噛む」

4. 他動詞：感情動詞（感情を抱く主体は絶対格、感情の向く対象は与格か絶対格）

˩gA「愛する」, ˩kaː˩「怖がる」

10.2 動詞につく音節を有する接辞

動詞に付加され、かつ音節を有する接辞には、以下のものがある。

1. 接頭辞：否定辞、疑問接辞、方向接辞

2. 接尾辞：TAMを表す接辞、動詞句末接辞、疑問接辞

これらは付加される本動詞とともに1つの声調範囲に入る。接頭辞には特定の声調の型が認められ、本動詞の声調にかかわらず音節初頭の高低が決定される。第2音節末の高低は本動詞

³⁸ 命令形だけが存在する動詞がある。たとえば/˩sʰɔŋ/「あっちへ行け」など。

の性格によって決まる。

なお、動詞語幹が複音節からなる場合、多くの場合最終音節に接辞類を付加する。ただし重複語幹の場合は必ず動詞第1音節に先行する位置に接頭辞がつくが、その際接頭辞だけが単独の声調を担うことがある。

10.2.1 否定辞

否定辞には、以下の2種がある³⁹。

1. 未完了否定：´ni
2. 完了否定：´mA

- (44) a ´ŋA-φ ˉmA ʰdzĩ-φ ´ni-tẽũ
1-[絶] これ 服-[絶] [否]-着る
私はこの服を（今）着ません。
- b ´ŋA-φ ˉmA ʰdzĩ-φ ´mA-tẽũ
1-[絶] これ 服-[絶] [否]-着る
私はこの服を（以前）着ませんでした。

完了否定は禁止命令にも用いられる。

- (45) ´mA-ŋgy
[否]-行く
行くな。/行きませんでした。

10.2.2 疑問接辞

疑問文を形成する接辞は接頭辞と接尾辞がある。ただし両者は共起しない。

接頭辞は1種類、接尾辞は2種類ある。

1. 接頭辞：ˉʔa
2. 接尾辞：´jẽ
3. 接尾辞：´mẽ

接頭辞は動詞語幹に他の接頭辞がつかない場合に限って現れる。動詞がTAM接辞を伴う場合、疑問接頭辞は動詞語幹ではなくTAM接辞の直前にも現れうる。接尾辞は文末に置かれ、明確な上昇調を伴う⁴⁰。両者の差異は明確ではないが、´mẽ/は驚嘆性を伴う疑問を形成する。

- (46) ˉtẽhʉʔ-φ ˉli su-φ ˉʔa-jĩ
2-[絶] リス族-[絶] [疑]-[判]
あなたはリス族ですか？

³⁹ 判断動詞の/ˉnɔŋ/の否定には以下のいずれでもない/´mi/という形式が付加されるが、これは/ˉnɔŋ/の否定専用の接辞である。

⁴⁰ それゆえ疑問接尾辞は記述の際に-で先行の形態素と連結しない。

- (47) ˈtɕʰuʔ-φ ˈpi:-φ ˈnɔŋ ˈmẽ
 2-[絶] チベット人-[絶] [判] [疑]
 あなたはチベット人でしょう？

10.2.3 方向接辞

方向接辞と考えられる要素には、次の3種類がある。

1. 上方：ˈjɛ
2. 下方：ˈmje
3. 中立：ˈpə

上方・下方の接辞は、通常移動動詞に付加され、移動の方向を示す。中立の接辞は、命令形を形成するときに積極的に用いられる文法化した範疇であると考えられる。

- (48) ˈŋA-φ ˈjɛ-ŋgɥ
 1-[絶] [方]-行く
 私は上へ行きます。

- (49) ˈŋA-φ ˈmje-ŋgɥ
 1-[絶] [方]-行く
 私は下へ行きます。

- (50) ˈdzĩ-φ ˈpə-tɕũ
 服 [方]-着る
 服を着なさい。

10.2.4 TAM を表す接辞群

動詞語幹の後部には TAM を表す接辞がつく。これらには2種類あり、1つは肯定文において単独で文を終止できるもの、もう1つは文の終止にさらに接辞を必要とするものである。また、述語動詞（存在動詞）・本動詞・形容詞に共通して付加できるものと、どれかに限定されるものに分かれる。

接辞類はその形態素の重複が認められない。

また、否定辞（接頭辞）は本動詞につくが、疑問接頭辞は TAM を表す接辞につき、かつ本動詞とは異なる声調範囲を形成する。

なお、接辞を伴わず動詞語幹で発話が終止する例も見られ、その場合は意思を持ってその行為をするという意味を帯びる。

- (51) ˈŋA-φ ˈbi
 1-[絶] する
 私がしましょう。

Zhollam 方言における TAM の全体像は明確に記述できる段階に至っていないが、少なくとも次のような枠組みが認められる。

1. 時制 (時間の直示): 現在・過去・未来
2. 完了性: 非完了・完了・到達
3. 証拠性: 判断・目撃証拠・直接知覚
4. 確信性: 確実・不確実

TAM を表す接辞群には以下のようなものが確認されている。

文の終止にさらに接辞を必要とするもの

以下に掲げるものは、1つの動詞句において共起することはないと見られる。基本的に、以下のすべての接辞にさらに付加される動詞句末接辞には-jīがある。いくつかは他の接辞を取りうる。

-zə / -ze (未来): 本動詞のみ

この形式は実際-jīが付加されると音節が縮約し、-zēj / -zīのように発音される。

- (52) ʔA-φ k^hWA:-φ ʔzɥ-zə-jī
 1-[絶] パン-[絶] 作る-[未来]-[判]
 私はパンを作るでしょう。

-da / -de (現在状態・進行): 本動詞のみ

状態を表す動詞につくときは現在の状態を強調し、動作を表す動詞につくときは進行中であることを表す。

- (53) ʔA-φ k^hWA:-φ ʔzɥ-da-jī
 1-[絶] パン-[絶] 作る-[状態]-[判]
 私はパンを作っているところです。

-wa (過去): 本動詞のみ

- (54) ʔA-φ k^hWA:-φ ʔzɥ-wa-jī
 1-[絶] パン-[絶] 作る-[過去]-[判]
 私はパンを作りました。

-pə / -mə / -wə (現在完了): 本動詞・形容詞

- (55) ʔA-φ k^hWA:-φ ʔzɥ-pə-jī
 1-[絶] パン-[絶] 作る-[現在完了]-[判]
 私はパンを作りました。

この接辞に後続する接辞は多く、-nɔŋ、-ka^f、-cō、-ce:、-ts^hi:などもつく。

- (56) ʔsɪŋ-φ ^hkē-mə-nɔŋ
 畑-[絶] 乾いた-[現在完了]-[証]
 畑は乾いています。

- (57) ʔtɥ^h?-φ ^htu: ʔa-pə-ka^f
 2-[絶] 空腹の [疑]-[現在完了]-[直接知覚]
 あなたはおなかがすきましたか？

-pa / -pa (確実性): 述語動詞・本動詞・形容詞

- (58) ʔlō ʔmbje: ʔsə tɕē-φ ʔjuʔ-pa-jī
明日 時間-[絶] [存]-[確実]-[判]
明日 (私は) 必ず時間があります。

この接辞の否定には完了形式を用い、「しなくなった/しないようになった」の意味になる。

- (59) ʔpʰa:-φ ʔma-ʰdeʔ-pa-jī
ぶた-[絶] [否]-いる-[確実]-[判]
ぶたはいなくなりました。

-fiA / -fiA (不確実性): 述語動詞・本動詞・形容詞

- (60) ʔŋA-φ ʔgɣ ʔfiəʰ:-fiA-jī
1-[絶] 行く できる-[不確実]-[判]
私は行くことができますでしょう。

- (61) ʔlō ʔmbje: ʔsə tɕē-φ ʔjuʔ-fia-jī
明日 時間-[絶] [存]-[不確実]-[判]
明日 (私は思うに) 時間があるでしょう。

文を終止できるもの

以下に掲げるものは、1つの動詞句において共起することはないと見られる。

-jī (判断⁴¹): ただし-jīを直接単独の本動詞語幹につける例は未確認、重複語幹・否定辞を伴う動詞は可能

- (62) ʔŋA-φ ʔʃA-φ ʔnʰɔŋ ʔŋa-ʰga-jī
1-[絶] 茶-[絶] 飲む 愛する-[重]-[判]
私はお茶を飲むのが好きです。

-nɔŋ⁴² (目撃情報および既知情報による証拠性): ただし-nɔŋを直接動詞語幹に付加する事例は少ないが形容詞にはつく

- (63) ʔʔa-ʰpjA-nɔŋ
[疑]-よろしい-[証]
よろしいですか？

- (64) ʔŋA-φ ʔʃʰə-ʃʰə-fiA ʔma-ʰkaʰ: zA ʔmə-φ ʔʃʰə-dA-lō
1-[絶] 死ぬ-[重]-[不確実] [否]-怖い しかし 人-[絶] 死ぬ-[名]-[与]
ʔʰkaʰ:-nɔŋ
怖い-[証]
私は死ぬのは怖くないですが、人が死ぬのを見たら怖いです。

⁴¹ 判断動詞と同じ語釈 [判] をあてる。

⁴² Zhollam 方言における動詞接辞/-nɔŋ/のより詳細な記述は Suzuki (2010) を参照。

-ka^ɿ (直接知覚⁴³): 本動詞・形容詞

- (65) ʼŋA-φ ʼ^htu:-ka^ɿ
1-[絶] 空腹の-[直接知覚]
私は空腹です。

-ε̄ɔ̄ (1 人称の受益・被害体験): 本動詞のみ

- (66) ʼŋA-l̄ɔ̄ ʼε̄ɔ̄ lA-je ʼ^hdejʔ-pə-ε̄ɔ̄
1-[与] 猫-[能] 噛む-[現在完了]-[体験]
私は猫に噛まれました。

1 人称の受益・被害体験を表す意図があれば、必ずしも 1 人称が文中に現れる必要はない。

- (67) ʼ^hs^ha:-φ ʼpje-ε̄ɔ̄
雨-[絶] 降る-[体験]
雨が降っています。(雨に降られています)

-εe: (1 人称の意思性の強調): 本動詞のみ

- (68) ʼta^ɿ: ʼŋA-φ ʼ^hdza nɔŋ ʼŋgɣ-pə-εe:
今日 1-[絶] [地名] 行く-[現在完了]-[意思]
今日私は維西県城に行きました。

-do: / -do (現在進行): 本動詞のみ

- (69) ʼŋA-φ ʼk^hwa:-φ ʼzɥ-do:
1-[絶] パン-[絶] 作る-[進行]
私はパンを作っているところです。

-t^hũ (動作の達成): 本動詞のみ

- (70) ʼtɕ^hɥʔ-φ ʼsēj-φ ʼsa ʼʔa-t^hũ
2-[絶] ごはん-[絶] 食べる [疑]-[達成]
あなたはごはんを食べ終わりましたか？

未完了の否定辞がついた動詞語幹に付加される場合、「～しないことにする」の意味になる。

- (71) ʼŋA-φ ʼma-φ ʼŋi -sa-t^hũ
1-[絶] これ-[絶] [否]-食べる-[達成]
私はこれを食べないことにします。

-ts^hi: (状態の達成): 本動詞・形容詞

- (72) ʼk^hwa:-φ ʼp^hja-pə-ts^hi:
碗-[絶] 悪い-[現在完了]-[状態達成]
碗は(自然に)壊れてしまいました。

-do la (非未来の事象に対する推測)

- (73) ʼtɕ^hɥʔ-φ ʼja^ɿ:-pə-do la
2-[絶] 疲れる-[現在完了]-[推測]
あなたは疲れたでしょう。

⁴³ ただし視覚による知覚を除く。視覚については/-nɔŋ/で表される。

-lA (未来の事象に対する推測)

- (74) ʼŋA-φ ʼjĩ kε ʼfi dʒA nɔŋ ʼŋgʏ-ze-lA
1-[絶] きっと [地名] 行く-[未来]-[推測]
私はきっと維西県城に行くでしょう。

-dʒə (義務)

- (75) ʼŋA-φ ʼjĩ kε ʼŋgʏ-dʒə-fia-jĩ
1-[絶] きっと 行く-[義務]-[不确实]-[判]
私はきっと行かなければなりません。

10.3 動詞連続

各種動詞語幹は特別な形態的手続きを加えることなく並列することで、動詞連続を形成することが可能である。その際、動詞の接辞類は最後の要素につく。接頭辞を伴わない限り、動詞連続は1つの声調範囲の中にある⁴⁴。動詞連続の後部要素は重複可能であり、この特徴が動詞接辞と異なる点であるといえる。動詞連続は移動を伴う動作を表現するものや、第1の動詞の表す語義に付加的な意味合いを与えるものもある。前者は移動動詞を用いた表現(「～しに行く」, 「～しに来る」など)に代表され、後者の例は以下のようなものがある。

ʼŋɔ̃⁴⁵ 「経験がある」

- (76) ʼŋA-φ ʼfi dʒA nɔŋ ʼŋgʏ-ŋɔ̃
1-[絶] [地名] 行く-経験がある
私は維西県城に行ったことがあります。

ʼtɕoʔ⁴⁶ 「させる」

- (77) ʼŋA-φ ʼkʰɣ-lɔ̃ ʼsɛj-φ ʼsa-tɕoʔ
1-[絶] 3-[与] ごはん-[絶] 食べる-させる
私は彼にごはんを食べさせます。

ʼtʰeʔ 「できる」

- (78) ʼma ʼsɣ my-φ ʼsa ʼʔa-tʰeʔ-nɔŋ
これ きのこ-[絶] 食べる [疑]-できる-[証]
このきのこは食べることができますか？

ʼfiəʔ: 「できる、してもよい」

- (79) ʼlaʔ pA-φ ʼna ʼpə: ʼma-fiəʔ:-nɔŋ
手-[絶] 痛む 書く [否]-できる-[証]
手が痛くて書くことができません。

⁴⁴ この場合、2つの動詞は-でつないで表される。

⁴⁵ この語の単独使用は未確認である。

⁴⁶ この語の単独使用および重複は未確認である。

ʔsoʔ 「できるようになる、してもよい」

- (80) ʔa lu-φ 15 ʔgy-ʔsoʔ
 子供-[絶] 道 行く-できる
 子供は歩けるようになっていました。

ほかにも、ʔʰe 「知っている」, ʔpʰo: 「あえてする」, ʔso 「させる」⁴⁷, ʰigA 「好きだ」などがある。

10.4 使役・態

使役文は先に触れた動詞 ʔtsoʔ 「させる」を用いて形成される。動詞語幹について特定の接辞を用いて使役動詞を形成する形態論的手続きは未確認である。使役の動詞が何であれ、使役者は絶対格で、被使役者は与格で標示される。

受動態に関しては特定の表示手段がない。意味上は動作主および被動者の語順によってどちらに焦点をあてるかを定めることができる。

11 複文と動詞句の埋め込み

ここでは、複文の形式と動詞句の埋め込みについて用例を掲げる。

2つの文で述べられる事象が継起的であったり、分かりやすい因果関係にあったりする場合、特に接続詞を用いることなく文を並列させることによって表すことができる。

順接の例

- (81) ʔŋA-φ ʔsã cĩ ʔbi-cõ ʔtʰũ ʔŋu:-pə-çe:
 1-[絶] 悲しむ-[体験] 一晩中 泣く-[現在完了]-[意思]
 私は悲しくて一晩中泣きました。

- (82) ʰdo lo mA-φ ʰda:-tʰũ ʔŋA-k3 ʔpə loŋ-φ ʔsow saŋ ʰbi-mə-nɔŋ
 岩-[絶] 落ちる-[達成] 1-[属] 牛-[絶] 受傷する-[現在完了]-[証]
 岩が落ちてきて私の牛は受傷しました。

逆接の例

- (83) ʔŋA-φ ʔŋĩ ʔgo ʔdø:-lō ʰkaʰ:-ʰkaʰ:-jĩ ʔtãʰ: te
 1-[絶] 以前 鬼-[与] 怖がる-[重]-[判] 現在
 ʔmA-ʰkaʰ:-pə-jĩ
 [否]-怖がる-[現在完了]-[判]

私は以前鬼が怖かったですが、今では怖くなくなりました。

文と文をつなぐ接続詞については、/ʔnA/ 「だから、～ならば、～のとき」, /ʰdzø/ 「～のとき」などが認められる⁴⁸。

⁴⁷ この動詞は本来「言う」と関連があるとみられ、「～しろと言う」の意味から派生した使役用法ではないかと考える。なお、Zholam 方言の本動詞「言う」は/ʔsə:/である。

⁴⁸ これらの接続詞は、発話された直後にポーズが置かれることが通例である。

(84) ʰpaʳ ja:-φ ʳdzA ʳdzɯ: ʲɯʔ ʳna ʳsa ʳma-tʰe:-ŋɔŋ
料理-[絶] たくさんの [存] だから 食べる [否]-できる-[証]
料理がたくさんあるので、食べきれません。

(85) ʳkʰɛ tsə ma ʳŋA-φ ʳfioŋ ʳʰdʒə ʳkʰɣ-φ ʳlo saŋ-lō ʳkʰA ʳmbje-de-ŋɔŋ
昨日 1-[絶] 来る とき 3-[絶] [人名]-[与] 話す-[状態]-[証]
昨日私が来たとき、彼はロサンと話をしていました。

動詞句が「言う」「思う」「忘れる」などの動詞の補文になるとときには2通りの言い方があり、主たる動詞に続いて補文の部分連続させる方法と、補文の部分に補文標識/dA/⁴⁹を伴って埋め込み、最後に主たる動詞をもってくる方法である。Zhollam 方言では前者が圧倒的に多い⁵⁰。

(86) ʳkʰɣ-φ ʳtaʳ: ʳma-ʳʰə-ŋɔŋ ʳmə-φ ʳka de-φ ʳŋɔŋ
3-[絶] 今 [否]-知っている-[絶] これ-[絶] 何-[絶] [判]
彼は、これが何であるのかまだ分かっていません。

(87) ʳkʰɣ-φ ʳŋA-lō ʳma-φ ʳhte:-da-lō ʳʰdʒe:-mə-ŋɔŋ
3-[絶] 1-[与] これ-[絶] 与える-[名]-[与] 忘れる-[現在完了]-[証]
彼は私にこれをあげることを忘れていました。

動詞句を埋め込む場合は名詞化標識(6.2 参照)が用いられる。

(88) ʳʂe ŋi-φ ʳsa-da-mə-φ-de ʳŋA ʳtɕʰɯʔ-lō ʳsə:-sə:-mə-φ
肉-[絶] 食べる-[状態]-[名]-[絶]-[主] 1-[絶] 2-[与] 言う-[重]-[名]-[絶]
ʳŋɔŋ
[判]

(今)肉を食べている人は、私があなたに話した人です。

(89) ʳŋA-φ ʳʰə-ʳʰə-da ʳʂə-φ ʳmō-mō-ʰiA-jī
1-[絶] 知っている-[重]-[名] 事柄-[絶] 多い-[重]-[不确实]-[判]
私が知っている事柄は多いと思います。

まれに名詞化標識を伴っていなくても、埋め込まれていると見える文が認められる。

(90) ʳŋA-φ ʳzɯ-zə-dʒə ʳŋA-φ ʳʰiA de-φ ʳzɯ-pə-ɕe:
1-[絶] する-[未来]-[義務] 1-[絶] すべて-[絶] する-[現在完了]-[意思]
私がすべきことは、私はすべてしました。

⁴⁹ これは名詞化標識と同形である。そのため、語釈は名詞化標識と同様に [名] と記す。

⁵⁰ 前者は媒介言語である漢語の構造である。そのため、媒介言語が影響を与えている可能性は否定できない。注目すべきは、後者のタイプも許容でき、かつ補文標識を伴って埋め込めるという事実であろう。

略号表

文法機能語で略号を作らないものは直接 [] の中に機能を書き込んでいる。複数の略号が重なるときは / で区切って示す。

[絶]	絶対格	[量]	量詞
[能]	能格	[判]	判断動詞
[与]	与格	[存]	存在動詞
[属]	属格	[重]	重複
[位]	位格	[証]	目撃証拠性
[内]	内格	[否]	否定辞
[具]	具格	[方]	方向接辞
[奪]	奪格	[疑]	疑問接辞
[比]	比較格	[主]	主題標識
[名]	名詞化標識		

参考文献

- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1-23
- (2009a) 《追尋消失的 r 介音—雲南藏語土話中的語音演變是否有納西語的影響—》2009 南開・語言接觸國際學術研討會發表論文
- (2009b) 川西地区“九香線”上的藏語方言：分布與分類 《漢藏語學報》第 3 期 17-29
- (2009c) 「納西文化圈のチベット語・永勝県大安 [Daan] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』2009-34 卷 1 号 167-189
- (2010a) 《雲南維西藏語的 r 介音語音演變—兼談“兒化”與“緊喉”交叉之謎—》第 17 屆東歐亞大陸語言研究會發表論文（東京）[遠藤光暁・田口善久編《上古漢語與漢藏語論文集》49-58]
- (2010b) 「カムチベット語維西塔城 [mThachu] 方言におけるそり舌化母音—その音声学的特徴の記述と分析—」『京都大学言語学研究』第 29 号 27-42
- (2011) 嘎嘎塘藏語的咽化元音與其來源 《語言暨語言學》第 12.2 期 477-499
- (forthcoming) 麗江永勝県大安藏語語音分析 《漢藏語學報》第 5 期
- 鈴木博之、ツェリ・ツォモ (2007) 「カムチベット語維西 [Melung] 方言の r 化母音とその来歴」『京都大学言語学研究』第 26 号 93-101
- Suzuki, Hiroyuki (2009a) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol. 3, 15-34, National Museum of Ethnology

- (2009b) *Historical development of *r initial in Gagatang Tibetan (Weixi, Yunnan)*, paper presented at 42nd International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (Chiangmai)
- (2010) *Copulative, existential and evidential usages of the verb snang in Gagatang Tibetan (Weixi, Yunnan)*, paper presented at 43rd International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (Lund)
- (2011) Deux remarques supplémentaires à propos du développement du *ra-btags* en tibétain parlé, en : *Revue d'étude tibétaine* Vol. 20 (à paraître)
- Suzuki, Hiroyuki & Tshering mTshomo (2009) Preliminary analysis of the phonological history of Melung Tibetan, in : *Language and Linguistics* 10.3, 521–537
- 《維西僳僳族自治縣概況》編寫組 (2008) 《維西僳僳族自治縣概況》民族出版社
- 吳成虎 (2007) 《維西漢語方言詞典》上海辭書出版社
- 吳光范 (2009) 《迪慶·香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索》雲南人民出版社
- 朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館

[付記]

筆者による Zhollam 方言の言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21-22 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)